

新しい幼児教育の実践

長等幼稚園プラン

朝、登園した子どもたちか、半日を幼稚園で過ごして、自分たちの力を出しきってあそび、みち足りた快い気持ちをもって家路につく姿をみることでできるとき、誰もが本当によかったなと思うであらう。子どもが幼稚園にきて、自分で何かをやったというを感じられるときには、そこで何かを学習しているのである。子どもは日々成長している。ということは一日の生活の中で、自分自身が動いて、活動している。自分が動いていないときには、その一日の子どもの成長は停滞していることになる。幼稚園の生活の中で、日々、子どもに成長してもらいたいし、もっともよく成長に役立つように心を砕き、実際に環境をつくってゆくことが、幼稚園教育の負っている課題である。

こんなことを考えながら、長等幼稚園の子どもたちのことを思い浮かべるとき、私は何か新鮮な息吹を感じざるを得ない。そこには、子どもの輝いた眼、真剣な生活態度がある。

外面的などころから言うならば、長等幼稚園では、クラスの壁をはずし、フロクラムの枠をはずしているという特長がある。すなわち、五つのクラスが組単位の活動をするのではなく、どの子どもも、どの部屋にても行ってよいようになっている。各部屋は、それぞれ別の機能をもっており、ある部屋は粘土や製作材料があり、ある部屋は音楽リズム、ある部屋は絵をかく材料、また他の部屋は絵本をよむ部屋があって、とくに大きな部屋では大つみきや運動具、ままごとコーナーなどがある。プロクラムの面から言うならば、朝、登園してから帰るまでの間に、クラス単位で集まるのは、日のべんとうの時と、帰る前のクラスの話し合いの時だけである。子どもはどのように動いてもよいのである。ある人は、このような保育形態を解体保育というが、何たか妙な名前で、この名称から誤解されるむきがある。そこで重要なことは、そこには少なくとも、熱心に遊びととりくむ幼児の姿があることである。保育室の床・面にビニールをしきつめて、大きなかめからひとかかえも粘土をとり出して、床にたたきつけている子どもの姿に出会って、はっとさせられる。大きな木の根っこにベニヤ板やなにかを打ちつけて、高い台の上にのぼって釘をうっている姿も壮観である。しかし、私どもの現実には常に完全ということはない。いつも過程である。どんなところでも研究せねばならない課題をたくさんかかえている。ここでもまた、解決せねばならない課題がたくさんあるに違いない。私は、この幼稚園の姿もひとつの過程としてとらえたい。そしてこの段階で、その新しい動きを見ていたことは、どこの幼稚園にも役に立つことと思う。